

# 近現代日本における美術品コレクターと経営者

## Art Collectors and Business in Modern Japan

プロジェクト代表者名：鈴木邦夫（経済学部・教授）

SUZUKI KUNIO

### 1 研究の経緯

これまで近代日本における屈指のコレクターである益田孝については、五島美術館で展覧会が開催されたときの図録『鈍翁の眼——益田鈍翁の美の世界——』（五島美術館、1998年）に「鈍翁コレクションのアルケオロジー」というタイトルで論考を発表し、このコレクションの形成と崩壊の過程を明らかにしており、また建築家でもある古物鑑定家の柏木貨一郎に関しては『芸術新潮』（2000年4月号）に「棟梁は大コレクター 奇人柏木一郎一代記」というタイトルでこのコレクションのうち現在国宝に指定されているものを中心に来歴を論じている。

このような成果を踏まえ、本研究は、後述する多くのコレクションについて形成と崩壊の過程を明らかにしようとするものである。

そのため、地方の美術館へ出張して、美術館設立の経緯を調べ、美術品の現所蔵者や旧所蔵者を確認する作業をおこなった。また、様々な図録・入札目録により、美術品の現所蔵者、旧所蔵者を調べる作業をおこなった。

そして、これらの作業を通じて、主に第2次大戦後の日本でどのような経営者が、どのようにして美術品購入の資金を調達したか、どのような美術品コレクションを形成したのかを明らかにする作業をおこなった。

### II 対象としたコレクション

個人コレクションの事例分析のうち、核となるのは専門経営者の益田孝・団琢磨・池田成彬・早川千吉郎・有賀長文・高橋義雄・加藤正義・神戸挙一・松本松蔵・馬越恭平・小林一三・松永安左エ門、新興ブルジョアジーの岩崎弥之助・安田善次郎・大倉喜八郎・藤田伝三郎・川崎正蔵・原富太郎・根津嘉一郎・茂木惣兵衛・長尾欽弥・大原孫三郎・石橋正二郎・畠山一清・細見亮市・松下幸之助・山崎種二、政治家の井上馨・田中光顕・福岡孝弟、旧大名家の伊達家・秋元家・若狭酒井家・雲州松平家・水戸徳川家、その他では赤星弥之助・松方巖・松方幸次郎・村山龍平・湯木貞一などである。

企業（宗教団体を含む）コレクションの事例分析のうち、核となるのは世界救世教（岡田茂吉）、神慈秀明会（小山美秀子）、創価学会（池田大作）、崇教真光（岡田光玉）、平等大慧会（梅本禮暉）、耕三寺（耕山寺耕三）、近畿日本鉄道（種田虎雄）、東京急行電鉄（五島慶太）、安宅産業（安宅英一）、出光興産（出光佐三）、サントリー（鳥井信治郎）、ポーラ化粧品（鈴木常司）、メナード化粧品（野々川大介）、大光相互銀行（駒形十吉）である。

### Ⅲ 成果

コレクションを崩壊させた重要な契機とそれにより生じた事態は、明治維新頃の政治的・経済的な混乱にともなう大名家・寺社・豪商からの美術品の流失、第1次大戦期の好況下での大名家による美術品の換金、1920年の戦後恐慌や1927年の金融恐慌の蹉跌にともなう商人・華族の美術品処分、第2次大戦後の財産税課税にともなう最大規模の美術品流失である。

また、戦前の場合には、個人が自分の資金で美術品を購入して大コレクションを形成したのに対して、戦後の場合には、経営者が会社の資金で美術品を購入して大コレクションを形成したという特徴を指摘できる。後者の場合の多くは、企業の帳簿から資金が支出されるため、企業経営の側面からみると、適正な支出手続きがなされたかを問われかねない。

例外といえるコレクションはつぎのものである。安宅英一が自らの眼で判断して購入した安宅コレクションでは、総合商社・安宅商会の取締役会で美術品を購入していくということ（すなわちコレクションをつくりあげること）を決議して、会社から毎年、陶磁器（とくに朝鮮で製作されたもの）を購入するという適正な手続きがとられた。